



50号
記念特集



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

『y a』50号達成を記念して

自分史図書館長 椎 窓 猛

図書館だより『y a』を創刊したのは、平成17年1月でした。以来5ヵ年目、ほぼ毎月1回は刊行、50号達成というのは嬉しく、慶祝の気にひたされます。創刊号をとりだしてみますと、八女民芸界随一の語り部ともいえる松田久彦さんの『八女を歩く』第一集を紹介しています。近々、第三集が刊行されるとの話を聞いています。ふるさと八女の歩みを、人を、手仕事を語り伝える人、かかる郷土学を支える人の存在はまことに貴重であります。人の思いとは妙なもので、お坊さん然りですが、身近な人よりも、遠くの人、それもセンセイと呼べる肩書名刺の人をあがめて有難がる風があります。本にしても大手出版、自費出版とは軽視しますが、真の眼さきは、見ているものです。身近なものに「y a」やあと声をかけていきたいものです。

y a 五十号発行に寄せて

広川町 野 中 勝 美

y a 五十号発行おめでとうございます。
五十号と一口に言えますが、一枚一枚の重みは計りしれないものを感じます。誰にでもできることではありません。椎窓先生なればこそと思います。
先生の自分史への情熱と、自分史図書館への愛情によるものだと思います。
各地より送ってくる自分史の綴り（エッセイ風・短歌集・俳句集）を毎号紹介して下さいますが、読破しないと紹介文は書けないと思います。先生の読書力にも頭が下がります。

紹介文は、毎号読むのが楽しみです。

「巻頭」の詩

これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

この詩にいつも励まされて書いています。

人生には、多くの人達と共有している部分もありますが、育った家、ふる里は人それぞれです。家族の中や、地域社会で育っていくうちに、いろいろな体験を積んでいきます。学校に行き、仕事については、更に体験は広がっていきます。一日一日は、道端の石ころみたいなものですが、生きた証しの一場面、一人一人にとってはかけがえのないものです。それこそ「喜びも悲しみも幾年月」です。

この自分史は、自分しか書けないと思います。言葉使いや、表現は、上手にはできませんが、真実を曲げないように書き残していこうと思います。

黄櫨での受講や、先生方、皆さんのお話を参考に、書く力を伸ばしていきたいと思っています。

新刊紹介

『苦境に生きた人生』

蔡金體・回憶録



黄櫨の会員春田文子さんが届けられた一冊、台湾の人の自分史である。添えられた春田さんの便りをまず紹介したい。「今日、台湾の日台友好会員の人で“蔡金體様”より自分史を送って来ましたので、珍しいので置かせて下さいませんか。終戦の時は小学校6年生だったそうで、

大変苦勞されたようで、薬局のような、医者のような、なかなか優秀、近畿大学通信教育で勉強したそうです。

息子さんは九州大学歯科を卒業医師です。」めぐりあった小学校時代の恩師のことからこの自分史は書きおこされているが、併合時代、台湾にわたった日本人教師は誠意をもって教育に当たっていたことがこの一冊からも証言されそうである。病気体験、その治療法も独特なものが伺われ、自分史図書館では、貴重な一冊として大切に保管したい。現在78歳と見られる。

思い出の本

立花町 平 島 格

「ビルマの花吹雪」 前編（著者）真鍋義利

後編（著者）西島富善

（立花町図書館蔵）

平成十年十月、立花町図書館の行事として読書感想文の募集があった。それには条件があった。当図書館の蔵書の中からということであった。その折、書架から偶然探し当てたのがこの標記の二冊の本であった。しかも著者が立花町に関わる人で尚親しみが湧いてきた。真鍋義利氏は立花町谷川上町の人、西島富善氏は復員後、伊万里市から立花町兼松にきて西島姓を名乗っている。現在は福岡市に住まれるそうだ。この本は「ビルマ戦記」だ。すぐ手にとって読み始めた。

私は以前から「菊兵团の栄光と苦闘」については少なからず関心を持っていた。町内で七十七柱の先輩達がビルマの地で尊い命を捧げている。二万五千人で兵团を組織した「菊」は数々の戦功を挙げ中支から南支へ、さらにシンガポール攻略戦では盛名を馳せた。この精鋭たちが終戦時にはビルマで僅か二千数百人、十分の一にまで減ってしまったというのではないか。兵团は苛酷な戦いを強いられ、兵員の苦勞が偲ばれる。

この本との出会いから私は「ビルマ戦史」の虜になってしまった。真鍋義利氏の家族からは「砲声」（砲兵隊の記録集）も譲り受けた。「あゝ菊兵团」牛山才太郎編も手許にある。生き残りの人を訪ねるうち、O氏から「もう老人には要らんけん貴殿が読んでくれるなら嬉か」といって渡された。「菊歩兵五十六連隊記」は生き残りの人々の戦争体験記である。古本屋で五千円で買った。まだまだ値打ちのある本だ。黄櫨会のH氏は尊い体験者で貴重な話を時々伺っている。

生き残りの人々を訪ねる中にこんなこともあった。Yさんは「菊」の生き残り。老人保健施設回寿園でのことだ。「戦友の墓参りをまだしとらん」という。戦友は初年兵からの親しい間柄の由。田形のHさん宅だ。引き合わせる事が出来たときは感激だった。

三冊の歴史ミステリー

広川町 武 藤 和 平

この世にある歴史の書はすべて勝者の書いた歴史書である。山本周五郎はこう言っている。「歴史というものは、その時の政治のかたち、権力の在り方によって、修正され、改ざん、ねつ造もしくは、まっ殺されたりしているものであります。」

明治維新についても、今なお多くの謎が隠されている。司馬遼太郎も書くことを避けた明治維新と明治天皇の暗部……。あるのは「坂の上の雲」だけではなかった。

明治維新と英国諜報部、そしてフリーメイソン。維新の英雄を動かした黒幕の正体が見えてくる。

読み始めたら、徹夜してでも読了したくなる三冊の本です。

「二人で一人の明治天皇」

松重楊江著 たま出版 ￥1,600

「幕末維新の暗号」

加治将一著 祥伝社

「あやつられた龍馬」

加治将一著 祥伝社

（三冊とも、久留米図書館にあります）

自分史図書館の本

八女市 高 橋 甲四郎

「名文を書かない文章講座」という表題で村田喜代子先生が、七年前に小倉と博多の朝日カルチャーセンターで文章講座を行った経験をもとに、一冊の本にされました。奇抜な表題ですね。ふつうは「名文を書くためには」とか「いい文章の書き方」などの表題をつけたがるが、これはそうはなっていないでしょう。このなかで、村田氏は次のように述べています。

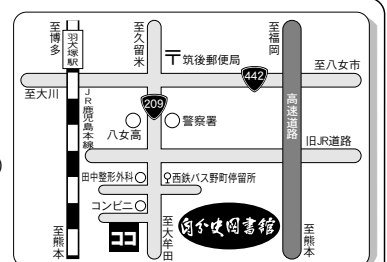
「文章とは何なのだろう。やはり言葉なのだ。口でしゃべれて、文章が書けないということはないだろう」そして身近な例として、幼児の独り言がすでに文章になっていることを次ぎのように指摘されています。

「子供の呟きこそ、時として名文になる。ということは、思うことをそのまま字に書けば、即文章が出来上がるわけである……」

こんな面白い本が、筑後市の「自分史図書館」にあるのです。読んでみませんか。

自分史図書館

開館 毎週水曜日
午前10時～午後3時
(祝・祭日・年末年始は休み)
入館無料
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。 jibunshiで検索